

平成 31 年度

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科

博士後期課程 2次募集（芸術工学専攻）

入学試験問題

小論文（60分）

【注意事項】

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は表紙を含め2枚あります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙は2枚配布します。  
解答用紙が不足する場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。  
解答用紙のそれぞれに、受験番号、氏名を記入してください。
- 4 この冊子のどのページも切り離してはいけないが、余白等は適宜利用してもかまいません。
- 5 試験終了後、問題冊子は回収します。問題冊子は持ち帰ってはいけません。

## 小論文

### 【設問】

「人間工学」をどのような学問と捉えているか各自の考えを述べた上で、「人間工学」の観点で改良が必要と考えるモノ、もしくは、コトの具体例をあげ、それに対する改良提案を行い、その提案を実現するための方法を説明しなさい。

## 小論文

### 【設問】

次ページから続く文章を読んだうえで、以下の問いに答えなさい。

### <問い>

論者がこの文章を示したのは、いまから14年ほど前である。

以降、私たちを取り巻く社会はさまざまな変化がもたらされ続けているが、現在においてなお論者の主張する“現代の私たちに対応する建築の空間”（下線部参照）は有効であると考えられるのか、それとも更新と新しい提案が求められているのか。

あなたの見解を、

まず、いずれ立場を取るかを示したうえで、

その理由を800文字程度で論述しなさい。

## 現代の建築の空間

現代の私たちにとって、精神、あるいはそれと表裏一体をなす身体のあり方は、限りなく曖昧で頼りなく、そしてまた同時に多様に解体していると言える。そんな不確かな私たちに対して、建築はいかに対応し、支えることができるであろうか。こんな思いが、ある建築家の作品集を見たときに、私の脳裏に浮かんだ。

こうした印象は、これから続々と建てられる予定のこの建築家の最新のプロジェクトが、意味の希薄な普通の建物とは異なり、密度の高い設計で卓越した芸術性を伴ったものでありながら、過去の良き時代の完結した古典主義的建築のように感じられ、よくできた美術工芸品的な対象物を見る気がして、決して現在の私たちの感覚に対応した現代の空間とは思えず、私の時代感覚と大きなずれがあったことに起因していると思われる。

私は本文中で、現代の私たちに対応する建築の空間がどのようなものであり、どのようにそれを構想できるかについて言及したいと思う。

### 1 | 空間に共振する私たちの身体、そして現代の不確実な社会における建築

私たちは、身のまわりの空間に沿った身体として生きている。この空間に沿う身体は、その空間のあり方に共振しているということでもある。しかし今日、私たちのまわりの環境をおおかた決定している建物による空間に、違和感なく感覚的に共感でき、私たちはそこに共振し、沿って生活し、活動していると言えるだろうか。

現在の私たちはあまりに速い時間のなかを生きている。当然のことながら私たちを取り巻く環境はすでにでき上がっている世界に形成されており、それと今とのずれが変化で埋め合わされている。今日の私たちの社会の変貌は、歴史上の変革期そして転換期と言われ、さまざまなかたちで語られるが、このことは、このずれの大きさがますます拡大していることを意味している。そしてそれらは既存のイデオロギーや価値そして制度の解体や再編を求める。この劇的な変化は、その加速度によって今日までの世界の確かさを危うくさせ、不確実な状態を増大させる。昨日の確かさがもはや今日では崩壊したと言えることが日常化している。この危うい関係は、社会的な制度や枠組みに限らず、物理的環境においても同様である。

### 2 | 現代の建築を対象としてではなく、環境として捉える

#### 対象としての建築／イメージの建築

建築を勉強し始めた頃の建築観と現在のそれとが大きく隔たったのを感じることもある。たとえば、以前は美的に表現された建物に建築としての魅力を特に強く感じたものであった。もちろん現在においても、雲や植物といった自然のかたちや幾何学形態、また玩具や機械などのかたちからの比喩的形態によって美的に表現された建物に華麗な美学を見いだせる。また劇的な空間を形成した建物も楽しく素晴らしい。こうした迫力ある非日常的な空間構成は私たちを幻想的で豊かなイメージに誘う。また軸線やシンメトリーといった幾何学的構成による形式主義的建築は、その構成そのもので建築の存在性を、そしてその根源性を顕在化し、記念性をもたらすことで魅力を持つ。そしてまた、ディコンストラクティブイズムと呼ばれる疑似アンチ形態主義者による構成の破棄は、それまでの形態や空間を散逸させて、新しいかたちと空間の世界を見いだそうとする。

こうした建築の魅力は、たとえば建物と関わる身体がそれに沿い共振し、それと一体化することによってもたらされるようなものではなく、建物自体を美術工芸品のように対象物として位置づけ鑑賞することによって得られる、視覚的な映像としてのそれである。建物、特に建築作品化した建物は、このように鑑賞するものとしての対象物であるがゆえに、面白く楽しい形態や空間をイメージ的に提供する。このようなイメージがドミナントになる建築は、そのことによって私たちの想像力を刺激し、建築の美学や意味を提供し、ひとつの豊かな建築の世界を見せている。

#### 環境としての建築／インクルーシブな建築

現在の私自身の建築に対するリアリティは、あるいは建築への期待は、いま述べたイメージを刺激する形態や空間の美的なもの、また感動を与える劇的な構成、そして建築そのものの存在の力を示す（意味の建築）にはない。そうした美学よりも、私たちの生活、活動、行為といった私たち自身の現実に関わる、私たちの自由を許し活発な動きを促す（環境としての建築）にあると言える。今日、ヴァーチャルなメディアでの世界とリアルな場という二面で引き裂かれている私たちの生身の身体と精神的身体とをともに支え、包含する建築にいま、建築の根拠を求めたい。

現在の建築的環境は、私たちの日常の生活を初めとする現実にはほんとうに対応しているか、その両者にずれはないのか。そのずれを埋め合わせることを問題にすることこそ、現在の私たちにとって、建築を構想することのように思われる。建築の新しい空間やかたちに求めることは、イメージとしては大きな創造性の獲得というより、私たちを拘束する類型化した枠組みを相対化し、新たなあり方によってそのずれを埋めるということであろう。これはある意味でいままでの建築という形式が、今日の私たちの生活や活動、そして実感や状況、すなわち私たち自身の生存に対して類型化し、ずれているということであり、その埋め合わせの作業によって、私たちの建築的環境がアナクロ化することなく、いまの私たちに沿う空間であり続けるのであろう。よく耳にする「今日ほど新しい空間が求められている時代はない」との言葉は、「現実の建築が私たちの現実とこれほどずれた時代はない」ということを意味しているとも言える。このことは、「ずれを埋める作業」といった消極的な言い方より、より積極的に「人びとの新たな活動を誘発し、発生させる建築的形式の提出」を意味すると言うべきかもしれない。

## 構成の形式としての建築

硬直化し、凝り固まった私たちの身体が、ただ自由に気ままな姿勢を取るのではなく、気功や太極拳、またさまざまな体操の形式化された型に沿うことで、柔軟さを快復し、自由を獲得するように、構成されたある種の空間や場に関わることで快適な自由を獲得する、そんな構成の形式によって私たちに関わる建物を（構成の形式としての建築）と位置づけることができそうだ。

現代の私たちにとって、自由に開かれた身体に対応できる建築空間は、またその形式は、本文で述べたように、いわゆる建物の部分部分のデザインの問題ではなく、ましてや形態の操作による修辞の問題でもなく、そして建物が対象として作りだすイメージの問題でもない。問題は、私たちの生活や活動が生き生きと活気づき、精神や身体が解放される、つまり人びとが自由なかたちで自分を獲得する、そんな場を成立させる座標としての空間を提出する形式にある。それは、現代での自由を獲得する、インクルーシブで私たちを枠づけない、意味の希薄な、あるいは未だに意味に染まらぬ〈意味の零度の場〉として与えられる構成である。

## 3 | 建築を構成として、構成の構造として捉える

### 開放系の空間

不確実な現代での精神や身体に沿う空間は、確固として私たちを支える空間ではない。厳格で強固な、そして意味の濃い空間に対応できるほど今日の私たちの身体は強固ではない。こうした意味で、あまりにもひ弱な現代人は、確定された位置にとどまるのではなく、ただひたすらそこで漂うのみである。完結し、閉じた空間にとどまれるのか。意味の零度の空間は、論理的には成立しても現実には成り立たない。私たちが今日生きられるのは、漂うことで相対化される空間の内と言え。そんな空間は、私たちの身体と精神とに柔軟に、緩やかに共振して対応する意味の希薄な場、それは非完結で開放された緩やかな関係の場所だろう。

モノとモノとが緩やかに関係する空間に、今日の私たちは共振し関われる。そしてそこには世界の完結と閉鎖に対立する開放性、そして連続性が必要となる。この開放系の空間は空間のルート・メタファーとなり、そこには、さまざまな空間の性格がメタファー的に見いだせる。たとえば部分と全体といったその場の構成の構造による空間である。

### 空間を形成する建築の構成

昨年二月に見たW・フォーサイス振り付けのフランクフルト・バレエ団の舞台は、部分と全体という構成、そしてその空間を興味深く見せてくれた。それは『失われた委曲』と題された二部のもので、第一部はバレエの特徴を極限までおし進めたと思える、激しく切れのよいメタリックな動きのもので、第二部はそれとはまったく異なって、滑らかではあるが不定形に反り返る身体、あるいは宇宙遊泳にも似たきわめて遅いテンポの曖昧で不安げな動きの舞で、不思議な舞踏空間を形成していた。両者はこのように対照的ではあったが、しかしそれでいて共通なもの強く感じさせた。それは両者とも二〇名ばかりの踊り手が、それぞれバラバラな独立した動きの舞のなかで、共有した空間を形成していることである。そこには、ほとんど中心が存在せず、一人一人の踊り手が同格的に舞台を構成し、しかもそれぞれはまったく独立して自由に、一見思い思いに動いているように見える。しかし、この中心の喪失した舞台は崩壊していないどころか、密度の高い空間を形成していた。

こんな部分が全体から独立し、自由な動きをなす空間を絵画のなかにも見たことがある。それはバリ絵画での村の風景描写で、マクロ的に見れば一様で均一的、そして混沌とした曖昧な場の広がりがあり、ミクロ的に見ればそれぞれの部分が独立して場をつくり、それらは活発な生命力が与えられている。さらにこれらの各場は、独立しながら柔らかな関係をもって、他の部分と、そして絵画の縁を越えて外部に連続している。そんな空間を比喩的に言えば、八つの頭が自由に独立して動く八岐大蛇に、あるいは各部の環節の運動のなかに全体がある節足動物に形容できる。

部分が全体の完結のための一部であったり、ヒエラルキーを構成する手段であったりする空間ではなく、こうして部分が全体から独立し、自由な関係をなす空間には、さまざまな部分の挿入も可能な開放系をシステム的に持つ構造があると言える。このような構造を建築的に成り立たせているのが、建築を成立させる構成である。つまり図となる部分が常に地に変換し、地の一部が図になる場の設定がその構成と言え。たとえば「コモンシティ星田」でのおおかたの構成は「無分節な傾斜面とそこにそれぞれ独立して緩やかな関係をもって散在する住戸」ということになる。この場を統合するのは、構成の部分である無分節な傾斜面であるが、そこでこの街の各部は常に地と図の交換が現象している。そして、このような場は確定された都市軸や中心からのヒエラルキーといった強い秩序によって統合されているわけではない。こうした構成による場は今日の私たちの身体と精神に対応する環境となっているはずである。

## 4 | 建築をその構成にまわりつく人びととの関係で捉える

私は本文で、現在の私たちに対応する建物による空間、そしてそれを形成する構成について述べてきた。それは、建物が鑑賞する対象、あるいは単に使用する施設を超えて、建築としていかに現在の私たちに関わるかを問題にしてきたと言える。本文で述べた開放系の空間、そしてそれを構成する形式、それは緩やかな関係の表現であるが、そのことによって人びとの自由な活動と共振しあう。そしてそれは、今日の私たちの乖離する理想と現実を吸収する形式となっているはずである。

（坂本一成/『構成の形式としての建築』/

“小さい建築に大きな夢を一世紀末に突きぬける言葉と形”  
アーキテクチュア・オブ・ザ・イヤーズ実行委員会/1994）